

日本の創作

語り合いたい。2020年 あの本、この本



荒木せいお、繁内理恵、西山利佳、東野 司（司会・編集部）
2021.1.24

——「子どもの文学」この「一年」創作をめぐる座談会を始めて。一つの作品に対して複数の視点で語り合うことで、読みの多様性を提示できたらと考えております。

本日は、荒木せいおさん、繁内理恵さん、西山利佳さんにお集まりいただきました。お三方にはあらかじめ「話題にしたい本」を選んでいただいております、これらの作品を中心に進めていきます。司会は、東野司がつとめます。

まず、お三方に、選ばれた観点をお話しいたします。最初に荒木さん。荒木せいおさんは、大学で児童文学に出会い、卒業後児童文学同人サークル・拓をつくられて、以来同人誌活動を続けておられます。一九八四年に「状況と主体」で第七回創作コンクール入選。二〇一八年には『冒険は月曜の朝』を出版されています。

荒木 作品を選んだ観点というよりは基準ですが、単純に心が動いたかどうかということです。もう少し言えば、登場人物にリアリティや魅力があるかということです。

——次に繁内さん。繁内理恵さんは、二〇〇五年からブログ「おいしい本箱 Diary」（現在「児童文学書評ブログおいしい本箱 bookcafe」）で児童書の書評を発表されています。二〇一八年四月より月刊『みずす』にて「戦争と児童文学」を連載され、本誌にも寄稿されております。

繁内 幼年ものは面白くて子どもの心に寄り添うものを、中学年以上のものは面白くて子どもに寄り添うもの、コロナによって社会問題が顕在化し